



熊野歴史の百花繚乱の響き
七里御浜が感動の渦になる

七流
曼荼羅

NPO法人
熊野生流倶楽部

2007.9 VOL.3

特集

熊野大花火大会ツアー

- 第4回2007熊野ウォーク報告
- ミニツアーin熊野レポート

〒530-0044 大阪市北区東天満2-2-3
ダイアパレス南森町1003号(有限会社環文化計画内)
TEL.06-6354-4166 FAX.06-6357-6041
<http://kumanoiseiryu.net>

大島 瑾子

◆花火の真髄は熊野。

熊野生流倶楽部で会員を募つてのツアーとしては3回目となる「熊野大花火ツアー」が、予定通りに行われた。この花火大会は約300年の歴史を持つが、本来の主旨は初精霊供養であったそうで、規模が大きくなった現在でも初盆の灯籠焼きや追善供養の花火が打ち上げられており、毎年お盆明けの8月17日に行われている。今年も開催が金曜日ということもあり例年より早い9時半、大阪から参加者およびスタッフ合わせて19名で出発した。

◆裏玉置に遙拝

途中道の駅で昼食を済ませた後新宮を抜け、開催場所の七里御浜のすぐ近くまで行ったが、そこからバスは海ではなく一路山の方へ、細い道で花火に向かう車達をかわしな



がら、丸山千枚田を眺めつつ花火とは別のもう一つの目的地へ向かった。そこは「裏玉置」と呼ばれる、天津川村の玉置神社が祭られている玉置山と対をなす「もう一つの玉置山」のふもとである。そこからは裏玉置の姿が遙拝できる。十津川村の玉置山が「陽」であるなら、こちらは「陰」であると聞いたせいかもしれないが、その姿は女性的な稜線で母性的な大らかさを持っているのかのように感じた。実際はちゃんとした道も無くそう簡単には登れない大変な山であるようだが、それも凛とした女性であるかのようなのである。全員揃つてお山に向かいそれぞれ胸に、二礼二拍手一礼(バスの運転手さんもつられたのか、お山に感じるところがあったのか、定かではないが一緒に手を合わせておられた)の後、バスで花火会場へと向かった。

◆カウント無しの三尺玉花火

熊野の大花火は海上や海岸の一番北側にある鬼ヶ城という岩場や洞窟から打ち上げられ、見物人は七里御浜の海岸に座つて観賞する。そのためどんなに人が多くても、約一万発の花火の一つ一つをゆつくり味わうことができるのである。花火の素晴らしさと迫力はどんなに説明しようとしても言葉で説明はできず(スゴイ!すごい!凄い!そうとしか言えない)、実際に見ていただくしかないのだが、特筆すべきはまずその轟音である。身体の芯に直接響き揺り動かされるかのようなのである。この響きだけはなかなか他の花火大会では味わうことはできないと思う。次に花火のアナウンスである。とても聞きやすくうまいけれども親しみのある、地元の方ではなからうかと想像させる声で一つ一つの花火をアナウンスしてくれる。毎年メインの三尺玉の花火(海面で約600メートルにも広がる花火である)は船で点火後、アナウンスの女性がカウントダウンを始めるのだが、かつて私が聞いた年でそのカウントダウンが爆発と合った試しが無く、今年はどうとう「カウントダウンはしません」と放送で言うってしまった。けれども見物人のために黙つてはいられなかったようで「間も

なくです！」と一言アウンスしていた。彼女のカウントダウンが無いと楽しみがひとつ減ったようで、来年は是非復活してもらいたい。合っても合わなくてもそれがまた楽しくて思い出や土産話になるのだから。

この花火大会では、希望者は追善供養や厄除け等自分で花火を打ち上げてもらうことができる。今年は県外の方の花火も多く、この花火大会をいつか見に行きたいと思いつながら果たせなかつた方のご遺族や、熊野が大好きで毎年訪れていた方のご遺族が打ち上げておられた。それらの花火の一つ一つのメッセージを聞いていると、思わず涙がこぼれてしまった。ひとりの人が生まれ、生きてそして逝くその様が綺麗な花火に重なり、残された者はその人生の意味をゆつくりと噛みしめながら見送る。それは脈々と繰り返される人の歴史であり、命の営みでもあることに改めて感動してしまつたのだ。

ひとりの生き様からすべての人へ、そしてすべての命へと思いが駆けめぐつたのも熊野という土地のせいであらうか。いずれにしても、供養であり、海や洞窟といった自然を使った花火は、命を思いやり自然を受け入れる熊野ならではのものであることに間違いないとぞうだ。

約一万発の花火が立て続けに打ち上げられ見学者の興奮と感嘆の音が飛び交います。



◆古道センターと須賀利

翌日はまず三重県の古道センターを見学。センターの方々は、古道や熊野の歴史や伝統文化を残そうと励んでおられた。次に三重県の方のご推薦で案内していただいたのが「須賀利(すがり)」という漁港で、尾鷲市の深い入り江の奥に位置し、人口が400人にも満たず平均年齢が60代という過疎化が進んでいる町である。巡航船で着いてみると、港から急な坂道が続き尾道を彷彿とさせるモノクロ写真が似合いそうな町だった。その坂の上のお寺のご住職に町の歴史をご説明いただき、その後散策したが、私が子どもの頃のようにどの家も鍵をかけていないのである。鍵どころか玄関も開けたままで、三重県の方が言っておられたように、昭和時代にタイムスリップしたかのような懐かしい町であった。過疎が進み、そこで暮らす方々はいろいろな問題を抱えているのであるが、昔のままの町があることにとても感謝したい気持ちになった。廃校になった小学校を使つて町の展示を行つたり、ご住職はじめみなさん町興しに取り組んでおられる。何とか良い残り方があることを願わずにいられない。

須賀利・普濟寺にて楽しいご住職と一同記念写真



須賀利の全景



熊野古道センター内部と外景



◆伊勢路の古道と感謝

須賀利の後、熊野古道の伊勢路である馬越峠ま(ごせとうげ)を少し歩いた。少しといつても峠越えの道であり、みなさん汗だくで石畳の上り坂道を歩いたが、古の熊野詣でを多少なり味わうことができたのではないだろうか。そしてバスは帰路につき、予定時間より多少遅れて大阪に無事帰着した。



毎回のことながら今回も参加者のみなさんに助けられ、無事ツアーを終えることができました。参加していただいた方ならびに、三重県の職員の方々ほかお世話いただいたすべての方に感謝いたします。

【瑾子】

第四回 熊野塾 ウオーク

満仲雄二



今回の海南市からの紀伊路は、今までのビルや町屋が立ち並ぶ、都市部の熊野古道の風景から打って変わって、いよいよ大自然の中の熊野古道と言った風情が感じられるコースとなりました。

● 出発地点は南方熊楠ゆかりの藤白神社！

天満橋から始まった熊野塾ウオークも、今回で4回目を迎え、集合場所が回を重ねることにとんどん遠くなっています。5月19日(土)朝、いつものように熊野方面にしか行かない「特別熊野御用達バス」が、不定期に謎に包まれて集合発着する大阪中央郵便局前を出発し、阪和道・湯浅御坊道路を経て、海南インターから藤白神社に到着。バスを降り立った瞬間に、境内の一の鳥居のすぐそばにそびえ立つ、大きな楠木が語りかけてくる。よー来たのおー：これこそ「南海の巨人：南方熊楠」ゆかりの大楠だと、世界的エピソードである熊楠の、スケールの大きさをや器の深さを、あらためて感じる事ができました。この藤白神社は、熊野五鉢王子の中でも第一王子として有名で、熊野への入り口と言つにふさわしい趣きを持つた神社だと思えます。五鉢王子とは、藤代・切目・稲葉根・滝尻・発心門の五つの王子を言い、九十九王子の中でも格が高いとされています。



また、藤白神社には熊野三山の中でも、阿弥陀如来(熊野本宮)千手観音菩薩(熊野那智)薬師如来(熊野新宮)の三体の本地仏が保存されていて、今回特別そばまで上らせていただきラッキーにも拝観することができました。



● 藤白神社から橋本神社へひとつ山越え！

藤白神社の裏手から熊野古道が藤白山に向かって続いており、すぐ200m程行った細い古道のそばに、皇位継承争いの犠牲となった悲劇の王子有馬皇子(640-655年)の墓がありました。みんな花を供え般若心経を唱え、遙か1300年以上昔のこの地の悲しい出来事に思いを馳せました。この辺りの古道は、民家の軒先に熊野古道の提灯が下げてあったり、家の玄関口に花や植木を並べ道の垣根もきれいに手が入っており、普段の生活道とは思えないほど、地元の熊野古道に対するおもてなしと心遣いがとても感じられました。

途中から急に山道に入り、ここからは「丁石地蔵」が案内してくれます。「丁石地蔵」は藤白峠まで18体の地蔵さんが置かれています。雑木の茂る鬱蒼とした細い山道を息を切らしながら登っていく旅人に、勇気を与えてくれているようでした。1丁が約109mですので、約1kmの行程です。辺りは、みかん畑に白い花が咲き、みかんの香りが風に乘って漂っています。他にもヒワ畑やキュウイ畑、素晴らしい青竹の林やさまざまな山野草に古道沿いにはあふれ、時折垣間見える和歌浦の海に、疲れも飛んでしまいうような雰囲気でした。

平安時代の堺の宮廷絵師が熊野権現の化身の童子と競画し、破れて松の根元に筆を投げ捨てた故事の「筆捨松」を過ぎ、急峻な坂を18丁石まで登ると、地蔵峰寺・塔下王子跡に到着。このすぐ裏の見晴らしの良い「御所の芝」からは、遠く紀伊水道の彼方に淡路島も見え、晴れた日には四国まで見渡せるそうです。

ここから先は、峠の下り坂：ホツと一安心しながら辺りを見回すと、山の斜面はすべてみかん畑。思わず「蜜柑の花が、咲いている。思いの出の丘：」と口ずさみながらの下り道。蜜柑の花が見られる季節に、香りを楽しみながら、アロマ街道としての熊野古道を歩けたことは、本当に良かったと思います。そして山を下りてしばらく進んだところにある「橋本神社」に到着して昼食を取りました。



丁石地蔵
青竹の林の古道



● 橋本神社から宮原の渡しへもひとつ山越え！

「橋本神社」の神様は、蜜柑とお菓子の神様の田道間守命(たじまのみこと)。日本書紀にも名が見える人物で、柑橘類を大陸から持ち帰ったとされています。どおりで神社拝殿の屋根の瓦に、蜜柑とお饅頭がのつていた訳です。そこから平坦な道をバスで少しワープして、沓掛王子からまた歩き出しましたが、坂・坂・坂：急峻な登り坂で、後を向いてバックして登った方が楽なぐらいの熊野古道。確かに眼下に広がる景色は、見る見る高くなっていき山々が一望の下に見えてきます。手前の民家の2階の高さになっていくほどです。おそらくこの辺りの日常生活に、自転車なんてものは無いように思います。沓掛の由来が、昔旅人がここで沓を草履に履き替え、脱いだ沓を松に掛けて登ったと言われていたから確かに凄いです。ところでその自分の沓は、熊野詣での帰り道にまた、ここで回収するのだろうか？と疑問を残しながら、ひたすら頂上の「拝の峠」を目指しました。

頂上には蕪坂塔下王子があり、ここからはまた下り坂。少し進むと、弘法大師もここに来て靈験あらたかに村人のために、山の中腹に水を湧かせたと言つ伝説もあり、その時自然石に阿弥陀尊と地藏尊を描いたと言われる「爪書地藏」の祠があります。この辺りの古道は、手入れが行き届いていなくて、道に野草は生え放題、古道沿いの民家は幽霊屋敷状態、鬱蒼とした森は魔物が棲んでいるようで、蜜柑畑も荒れ放題。…どこが世界文化遺産・熊野古道なのかと目を疑うほどですが、おそらくユネスコの指定を受けなかった地域かと…。

しかしそれは本末転倒の話であって、先人から継承してきている大事な祈りの参詣道を、なぜ地元の人々が誇りを持って保存しないのか？…この当りに、目先の欲得損に振り回される行政や民衆のこころの貧しさが如実に現れているような気がします。また村起こしをしなければ…(笑)

途中、100人からなるバスツアーの一行と山麓のみかん畑ですれ違つたが、延々と続く人の群：「まさに蟻の熊野詣では、こんな感じだったんだらうなー！」と想いを馳せてかなり待ちながら…ふと気付くと、その一行は熊野への逆行の道行き！まあいいか、きつと彼らは熊野詣での帰り道なんだと妙に納得して、やり過ごした次第です。下の山口王子は公園になっていて、そこから宮原の渡しまでバスでワープ。今回は二つの峠越えで、私達は足がたがたになつていただけ、昔の上皇達の熊野詣での一行は、次の王子までさらに一つ峠を越え、三つの峠を歩いた記録が残っているからもう脱帽。さあ足腰をもっと鍛えて次の熊野塾ウオークに臨みましょう！

※今回は、今回の到着地・宮原の渡し(有田市)を出発点として、道成寺(予定)まで熊野古道ウオークを、開催予定です。

ミニツアー IN熊野レポート

廣田朱美

お馬にまたがった 坂上田村麻呂霊ゆかりの大馬神社へ



●大馬神社へ再び

2007年6月30日(土)ミニツアー別名、行き先はわかっているミステリーツアー(?)の出發を晴天のもとに迎え、参加者6名、選りすぐりの精鋭スタッフ3名は、いつものごとく例の出發場所に心ウキウキと集まり、スタッフ國さんの見送りを受けながら、イザ参らん！と大阪を後にしました。いつものごとく奈良の裏道を走り、一路目指すは三重県熊野市の大馬神社(おおまじんじや)です。ミニツアーの特徴はスケジューリングがゆるいところ…。気ままに動くのも得意技です。その日のランチは「おいしいもんを食べよう」のアンテナを働かせ、予約なしで熊野市駅近くの魚料理のお店へ。手ごろな値段でボリュームいっぱいランチで大満足。いよいよ熊野市では一番の古社で坂上田村麻呂ゆかりの大馬神社へ！大杉の林立する参道を登ると本殿があり、今回の目的の一つはその奥の道なき道を行くと、大馬の清滝という素晴らしい滝があり、そこで川遊び？というか、まつたりしましようという事でした。予定では滝は水しぶきを轟々と…のはずが梅雨時にも関わらず、2月に行った時とあまり変わらず、ここにも異常気象の影響が出ているんだと思えました。しかし水は清らかで冷たく、足をつけたら、スタッフM嬢は頭を滝に…実はM嬢ツアーの前からある計画が…スイカを川で冷やしてがっつり戴こう！と包丁も用意し、スイカも仕入れ…でもまずは神様が先だよね〜と本殿で松本宮司さまとお参りさせていただきました。予定ではお下がりとなったスイカを川

で…のはずが、下がらなかったんですね〜スイカ。でスイカでいっぱいになっていた頭を冷やした…のかも？確かに滝のその場所は玉置神社の神官さん達も禊をする神聖なエリア。松本宮司さんもふんどし一丁の勇姿で翌日の海開きの神事の為の禊をされました。次回来る時は是非、禊を…と。やっぱりスイカはまずいかな？



●熊野川下り

その夜の宿はおなじみ「ハマケン」さんです。途中でスイカを買いました(笑)夕食においしい魚をいただき、さあ解散？いえいえミニツアーはまだこんな事では終わらない！再び、車に乗って御浜へ…。今夜は満月なので、波打ち際で月光浴をしよう！と決まり、海面に月光がきらきら煌く浜で時間を忘れて過ごしました。翌日は熊野川下りです。ちよっと観光っぽいですが、これも熊野古道

のひとつ。昔の天皇さんもこうして川を下り、この川岸の風景を眺めたのかと船頭さんの説明を聞きながら思うと感慨深い気がしました。船の終点は新宮の速玉神社の裏手。曇り空で暑くもなく、雨も降らず…



全員集合！カメラ目線でハイポーズ傘とライフジャケットが変ですが。

恵まれた天候でした。その後、湯の峰温泉へ立ち寄り、100度近い源泉でお芋や卵、とうもろこしを湯がいて食べたり、わたらせ温泉でじっくり温泉に入ったり、充実の二日間はあっという間に終わり、無事大阪に帰り着きました。スタッフ3人も参加者のみなさんと同じように楽しませていただくミニツアー！さあ！次回は何処へ行きましょうか？

●編集後記

今回から季刊情報紙がA4サイズになりました。今号は熊野花火大会が特集ですので「花火はカラーでないかわかん！」という訳で全カラーページになっております。お楽しみください

熊野生流倶楽部・生流専務・編集部